

# 居場所の価値見える化調査 分析結果

## 調査概要

本調査は不登校児童生徒および不登校経験者にとっての居場所の価値および価値を見出すプロセスを明らかにすることを目的として実施した。調査対象となる居場所は、NPO 法人多様な学びプロジェクトのネットワークから、居場所の価値について語るができる不登校児童生徒および不登校経験者の紹介が可能な対象を選定した（図1）。以下の対象者（図2）についてインタビューをおこない、得られたインタビューデータを対象に M-GTA によって分析した。

図1 調査対象居場所

調査対象居場所
<ul style="list-style-type: none"><li>・ フリースペースえん（神奈川県川崎市）</li><li>・ こどもサポートチームすわ（長野県諏訪市）</li><li>・ フリースペースコスモ（東京都三鷹市）</li><li>・ むすびつくばライズ学園（茨城県つくば市）</li></ul>

図2 インタビュー対象者

	年齢・性別	居場所との関わりと 現在	居場所利用までの経緯や居場所の利用頻度など
利用者 A	10代・男性	居場所利用中/ フリーター	小学校4年生冬から居場所の利用を開始。現在は週2-3回利用。高校は通信制高校に通い（週1-2回）ながら居場所はほぼ毎日利用。利用のきっかけは、不登校になり、保護者が見つめてきて利用することになった。他の居場所や公的な居場所の利用経験はない。
利用者 B	20代・女性	居場所利用中/ アルバイト	小学校1年生から学校の先生とうまくいかず、4年生から不登校に。小学校6年生の最後から居場所を毎日利用し、現在も週2-3日利用中。中学校は1週間ほどで不登校になり、その後、高校には進学せず、居場所の利用を継続。週4日でアルバイトをしていた時期（16歳頃）は居場所をあまり利用していない。他の居場所は公的な居場所の利用経験はない。
利用者 C	20代・女性	居場所 OG/ 大学生	中学2年生から、いじめによる体調不良で不登校に。不登校時代は親との仲もあまりよくなく、家でずっと寝ていた生活。高校は行く気力がなかったものの、どこかに所属したほうがよいという学校の先生の声かけで定時制高校に進学。その後、高校1年で退学。高校1年の春（17-18歳）くらいから、学校の先生が居場所主催の講演会の予約をとってくれたことがきっかけで利用開始。利用から半年～1年は2～3ヶ月に1度利用し、高校2年生からは週に2～3日利用。他の居場所は公的な居場所の利用経験はない。
利用者 D	20代・男性	居場所スタッフ	中学校1年生の夏休み以降不登校に。母親からの声かけで、中学校2年生の秋から利用。当時は週3日～毎日利用。通信制高校在籍中も居場所を利用。高校卒業後18歳から居場所スタッフとして現在まで働いている。他の居場所は公的な居場所の利用経験はない。
利用者 E	10代・女性	居場所利用中	中学校1年生の夏休み明けから不登校になり、同居の祖母の紹介で居場所を利用するようになる。学校との関わりはほとんどない。居場所は週3日、10:00/12:00-16:00利用。利用歴1年弱。
利用者 F	10代・女性	居場所利用中	小学校3年生から不登校傾向。何回か中学校に登校したが継続できず、母親の勧めで中学校1年生の後半頃から居場所利用開始。小学校4年～6年生の間は学校が関わる居場所も利用したが、学校の近隣であることやスタッフが学校関係者のような人だったことから利用しなくなった。現在居場所は週3日、9:50-16:30利用。利用歴約1.5年。

利用者 G	10代・女性	居場所利用中/ 通信制高校生	小学校3年から特別支援学級に通ったが、その後不登校となり家中心の生活に。小学校4年生から5歳年上の兄が利用していたことから居場所利用開始。中学校時代は2年ほど利用休止期間あり。現在は週3日 10:30-16:30/17:00 利用。
利用者 H	10代・男性	居場所利用中	小学校1年生の夏休みから不登校になり、小学校3年生から居場所利用開始。居場所利用前は祖父母の家（元教師）で過ごす。現在居場所利用7年目。利用時間は10:00-17:00。学校との関わりはない。他の居場所は公的な居場所の利用経験はない。
利用者 I	10代・女性	居場所利用中/ アルバイト・高卒認定 試験に向けて勉強中	小学校1年生から不登校にあり、小学校2年生から高校1年生まで利用。中学校1年生で1学期ほど中学校に通学したが、その後は不登校になり居場所利用を継続。居場所は毎日10:00-17:00で利用。高校進学するも、退学し、現在アルバイトと高卒認定試験に向けて勉強中。
利用者 J	10代・女性	居場所利用中	小学校2年生の夏休み明けくらいから不登校傾向。小学校3年生～6年生まで毎日居場所利用。学校には月1回程度定期的に通っていた。親戚が居場所で勤務していたことがきっかけで利用開始。中学校1年生の2学期までは学校に登校したが、3学期から居場所利用、中学校2年4月～6月は登校、それ以降居場所利用を継続。
利用者 K	10代・女性	居場所利用中	小学校1年生から3年生までは、不登校傾向ではあったが保健室を基地として登校。4年生の時に保健室の先生が変わったことで完全に不登校に。保健室登校をしていたが、保健室の先生が変わったことで完全に不登校に。母親の友人の子ども（幼稚園の頃からの知り合い）が居場所を利用していたことがきっかけで小学校6年生から利用開始し、現在週3日利用中。
利用者 L	20代・男性	居場所 OB/ 大学生	小学校1年生の6月頃から不登校傾向。小学校は週3-4日、調子がよければ5日ほど登校していた。中学校1年生の後半からほぼ学校に行かなくなり、不登校に。小学校の学童の友人が居場所を利用していたことがきっかけで、中学校2年生から高校卒業まで利用。
利用者 M	20代・女性	居場所 OG/ 社会人	小学校4年の始めから同級生や先生からのいじめが原因で保健室登校になり、4年生後半から不登校に。母親がインターネットで居場所を見つけ、小学校5年-6年の2年間居場所を利用。利用は週4日 10:00-15:00。その後中学に進学。

## 分析結果

M-GTA による分析の結果、26 の概念、10 のカテゴリが生成され（表）、それらの関連を「不登校経験者が感じる居場所の価値とその価値を見出すプロセス」として結果図（図）に整理した。これらの概念、カテゴリは5つのフェーズ（①居場所適応期、②自己の回復と創造期、③自己成長期、④自己発展期、⑤社会適応・活躍期）に分けることができると考えられた。以下では、生成された概念（<>で示す）、カテゴリ（【】で示す）を用いて、ストーリーラインを記述する。

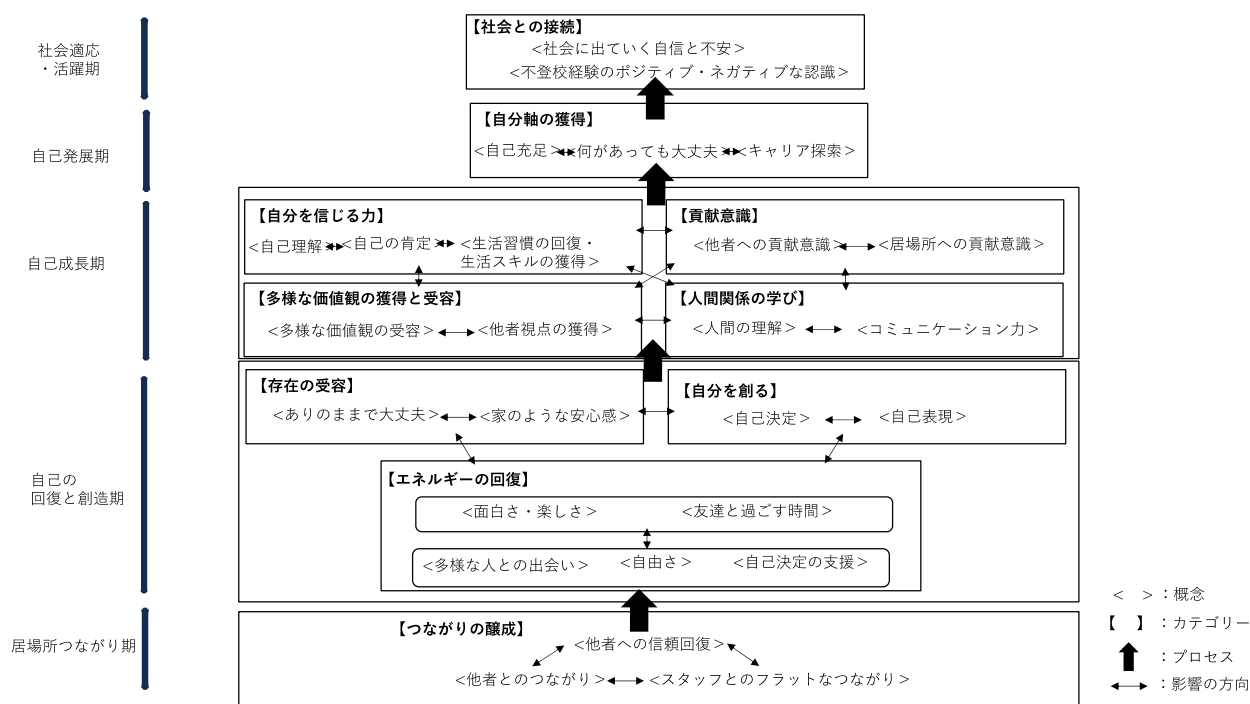
### 不登校経験者の居場所の価値 生成概念リスト

フェーズ	カテゴリ		概念		
居場所つながり期	1	つながりの醸成	1	他者とのつながり	同年齢・異年齢の他の利用者との関係が生まれ、友達や仲間の関係ができる
			2	スタッフとのフラットなつながり	スタッフとどんなことでも話せる対等で友好的関係ができる
			3	他者への信頼回復	周りの子どもやスタッフ、大人を信じてできるようになる
自己の回復と創造期	2	エネルギーの回復	4	多様な人との出会い	同じ不登校の利用者や障がいをもつ利用者、学校の先生とは違うフラットに関われるスタッフなどとの出会い
			5	自由さ	やることもやらないことも自由、どんな自分であることも OK である自由さを感じる
			6	自己決定の支援	やりたいことを諦めるのではなく、やりたいと思うことをスタッフや仲間にサポートしてもらえる経験
			7	面白さ・楽しさ	人を信じていることができない、自己を否定してしまう状態から、様々な活動や人にサポートしてもらった経験や何もしない時間などを通じて、何かに取り組むことの楽しさや面白さを感じ、物事を前向きに捉えたり、取り組もうと思えるようになること

	3	存在の受容	8	友達と過ごす時間	趣味や話が合う、本当の自分を出しても大丈夫だと思える友達に会えること
			9	ありのままで大丈夫	ありのままの自分を出しても、存在を否定されず、受け入れてもらえると感じること
			10	家のような安心感	いつでも、どんな自分でも受け入れてもらえる、心の支えを得ることができる、戻ることができると感じられる
	4	自分を創る	11	自己決定	何をやるか、誰とやるか、やらないかを自分で決めてできる、自分の好きなことを追求することができる
			12	自己表現	受け止めてもらえないかもしれないという怖さを乗り越え、自分の考えや思いを言葉で伝えたり、行動で表すなど自分らしさを表現すること
	自己成長期	5	多様な価値観の獲得と受容	13	多様な価値観の受容
14				他者視点の獲得	他の利用者やスタッフの立場から物事を見れるようになること
6		人間関係の学び	15	人間の理解	人に対する不信感を払拭し、人を表面的なことで判断することなく、その人の本質を理解できるようになること
			16	コミュニケーション力	異なる年代、背景を持った人とコミュニケーションをとることができること
7		自分を信じる力	17	自己の理解	自分の強みや適性、何が好きなのか、自分らしい生き方などを理解すること
			18	自己の肯定	イベント、野外活動、宿泊活動、勉強など、自分の安全地帯を超えた体験や成功体験などを経て、今の自分を肯定的に受け止めること
			19	生活習慣の回復・生活スキルの獲得	朝決まった時間に起きる、運動する、食事を作るなどの生活習慣やスキルを獲得できること
8		貢献意識	20	他者への貢献意識	居場所を利用する自分以外の利用者のために何かをしたいという意識を持つこと
			21	居場所への貢献意識	自分を支えてくれた居場所のために何かしたいという意識を持つこと

自己発展期	9	自分軸の獲得	22	自己充足	日々、発見や刺激があり毎日に満足していること
			23	何があっても大丈夫	どんなことが起きてもなんとかなるだろうという未来や将来に対する楽観的な展望が持てること
			24	キャリア探索	居場所で過ごした経験が進路や、自分の適性、職業を考える機会になっていること
社会適応 ・活躍期	10	社会との接続	25	社会に出ていく自信と不安	応援やサポートしてくれる人の存在やこれまでの成功体験から社会でやっていけるという自信を持つ一方で、対人関係などでまた失敗してしまうのでは、規則正しい生活ができるかなどの不安も同時に感じている
			26	不登校経験のポジティブ/ネガティブな認識	不登校になったからこそ今の自分があると不登校経験をポジティブに考えられる場合と、もっとながらばれたのではなかったかという自己否定や不登校だったことへの引け目の気持ちが残っている場合がある

図 全体の関連図



なお、居場所の価値をより理解するために、インタビューで語られた「居場所に接続する前の状態および居場所に接続した初期の状態」を以下に示す。

居場所接続前の状態

- 他者軸で行動する
- 自分を隠す
- 学校に行かなくてはならないというプレッシャー
- 学校が怖い
- 学校は強制的に連れていかれる場所
- 心身状態の悪化
- 受け止めてもらえない不安
- 学校に行けないことへの自己否定
- もう少し頑張れるのではないかと自己責念
- 日中家で過ごしていることへの罪悪感

居場所接続初期

- 学校に登校しなくてはならないというプレッシャーからの解放
- どこかに接続できている安心感
- 学校にいけていないのは自分だけではないという安心感
- いじめられるかもしれないという不安
- 怖い場所かもしれないという不安
- 勉強をしなくてはならないという意識
- 居場所に行くための勇気と元気が必要

居場所に接続する以前は、学校生活になんとか適応するために、親や大人に気を遣い思っていることを言えないなど「他者軸で行動する」、「自分を隠す」、「学校に行かなくてはいいけない」など強度のプレッシャーを感じていたことが語られた。学校は、「怖い場所」、「強制的に連れていかれる場所」になり、その結果、心身の状態は悪化し、「今の自分では受け止めてもらえない不安」、「学校にいけないことへの自己否定」、「もう少しがんばれるのではな

いかという自責の念]、「日中家で過ごしていることへの罪悪感」を強く感じていたことが語られた。

居場所に接続した初期は、「学校に登校しなくてはならないプレッシャー」からは解放され、「学校に行けなくてもどこかに接続できている安心感」、「学校に行けていないのは自分だけではないという安心感」を感じていた。一方で、「またいじめられるかもしれない」、「受け入れられないかもしれない」、「怖い場所かもしれない」という感覚があることが語られた。また、「勉強しなくてはいけない」という意識もあるほか、居場所は学校とは異なる場所であるにもかかわらず、これまでの傷いた経験から居場所に行くためにも勇気と元気が必要な状態であった。

## ストーリーライン

### ① 居場所つながり

居場所ですぐ時間の中で、不登校経験者（以下、「利用者」と記載）は同年齢や異年齢の利用者など<他者とのつながり>やどんなことも気楽に話せる<スタッフとのフラットなつながり>を持つようになる。彼らとただ一緒に過ごす時間や活動を共にする中で<他者への信頼を回復>し、居場所の中に【つながりの醸成】がなされ、居場所への適応が進んでいく。

### ② 自己の回復と創造期

居場所の様々な活動などを通じて多様な個性を持つ利用者居場所の卒業生、スタッフ、外部の人々など<多様な人との出会い>が生まれる。居場所では、やることもやらないことも自由、どんな自分であることも OK である<自由さ>や他者の顔色を気にしてやりたいことを諦めるのではなく、やりたいと思うことをスタッフや他の利用者にサポートしてもらえる<自己決定の支援>を受けられる経験を得る。様々な活動、サポートしてもらった経験、なにもしない時間、ただ<友達と過ごす時間>を通じて、居場所で過ごす<面白さ・楽しさ>を感じ、物事を前向きに捉えたり、何かに取り組んだりしてみようとする【エネルギーの回復】がなされる。

自分の【エネルギーの回復】が進む中で、居場所では、ありのままの自分を出しても、存在を否定されず受け入れてもらえるという<ありのまま大丈夫>な感覚や<家のような安心感>を感じられることで、自分自身の【存在の受容】ができるようになる。

自分が自分自身を肯定的に受け入れながら、居場所で何をやるか、誰とやるか、やらないかなど<自己決定>の機会や自分の考えや思いを<自己表現>する機会を積み重ね、徐々に【自分を創る】経験と時間を積み重ねていく。



### ③ 自己成長期

多様な人との出会いや活動を共にすることで、物事や人に対する見方や価値観が多様化し、＜多様な価値観を受容＞していくと同時に、他の利用者やスタッフの立場から物事を捉えることができるようになる＜他者視点の獲得＞をし、【多様な価値観の獲得と受容】が進んでいく。また、人と関わる経験を通じて、人に対する不信感を払拭し、その人の本質を理解できるよう＜人間の理解＞や多様な人との＜コミュニケーション力＞など【人間関係の学び】を得る。

他者からの学びだけでなく、自分の強みや適性、自分らしい生き方など＜自己の理解＞や居場所の様々なイベント、野外活動、宿泊活動、勉強など何かに挑戦する経験や成功体験を経て＜自己の肯定＞が進んでいく。学びや自己への信頼が得られるようになるだけでなく、朝決まった時間に起きる、運動をするなどの＜生活習慣の回復・生活スキルの獲得＞もできるようになり、普通の人ができることができるようになったことも含め【自分を信じる力】が高まっていく。

居場所で過ごす期間が長期にわたると、徐々に居場所を利用する他者のために何かをしたいという＜他者への貢献意識＞や自分を支えてくれた居場所のために何かしたいという＜居場所への貢献意識＞を持つようになる。

### ④ 自己発展期

自己の回復と創造や成長が育まれる中で、居場所での生活に発見や刺激があり、毎日に満足している＜自己充足＞の状態が続くと、どんなことが起きてもなんとかなるだろう、自分は大丈夫だろうという未来や自分に対する＜何があっても大丈夫＞という感覚が生まれる。居場所での経験や出会いが進路や職業など＜キャリア探索機会＞にもつながる中で、他者の評価ではなく「自分がどうしたいか」を基準に考えることができるような【自分軸の獲得】が進む。

### ⑤ 社会適応・活躍期

自分をサポートしてくれる人の存在やこれまでの成功体験から＜社会に出ていく自信＞を持つ一方で、対人関係などでまた失敗してしまうのではないかと、規則正しい生活ができないのではないかと＜社会に出ていく不安＞も同時に感じている。不登校になったからこそ今の自分があるという＜不登校経験のポジティブな認識＞と、もっとがんばれたのではなかったかという自己否定や不登校だったことへの引け目の気持ちなど＜不登校経験のネガティブな認識＞を持った状態で【社会への接続】を進めていく。

## 保護者へのインタビュー

調査対象の居場所を利用する保護者4名に対し、居場所利用の経緯、利用状況、利用してよかったこと、改善点、自分自身の変化などについて半構造化インタビューを行った。保護者の属性は以下の通り。

### インタビュー対象者（保護者）属性

保護者 A	お子さんは中学3年生相当年齢の男子。小学校1年の5月くらいから不登校傾向になり、小学校2年9月から利用開始。
保護者 B	お子さんは中学3年生相当年齢の男子。小学校3年生から学校に行けない時期があり、支援級に通級。中学も支援級に通級したが、中学1年生から不登校。中学1年の終わりから利用開始。利用頻度は毎日9:30-15:00。
保護者 C	お子さんは16歳の女子。小学校2年生から不登校傾向。小学4年で不登校になり、家庭で過ごしたのち、小学5年春から利用開始。中学は週1-2日、参加したい活動にのみ参加。
保護者 D	お子さんは通信制高校3年の男子。1歳-小学1年生まで海外。小学1年生-4年生まで都内公立学校。小学5年から関東の市立小学校。小学校6年から不登校になり利用開始。私立中学に進学後、中学1年11月に退学。中学2-3年は家庭で過ごし、その後通信制中学利用後、再度居場所利用開始。私立高校進学後、なじめず、高校1年年末に退学。高校2年から通信制高校に在籍。

## 1. 保護者からみた「居場所接続前の子どもたちの状態」

<p style="text-align: center;">子ども 学校システムへの不応</p>	一斉授業が合わない
	集団行動ができない
	暴れる
	教師の言動に傷つく
	自己否定/自殺願望
	先生が怖い
	騒がしい・学習環境が選択できない
	学校へ行けないことへの拒否感
	大人のあるべきの強制
	できない子ども/問題児というラベル
	学校に対する不信感・嫌悪感
	体調不良
	<p style="text-align: center;">保護者</p>
どこかに接続させなくてはという焦り	
フリースペースで勉強は大丈夫なのかという不安	
不登校への無理解/理解不足	
発達障害に関する理解不足	
送迎などの負担	
子どもにあう居場所探しの負担	
ストレス・心労	
助けが必要	
保護者子ともに追い詰められる	
子供も保護者も誰も幸せではない	

## 2. 保護者からみた「子ども・保護者にとっての居場所の価値」

子どもにとっての居場所の価値	ありのままの子どもの受容	こうあるべきという価値観を押し付けない
		排除されない
		評価しない
		一人の人間としての関わり
		多様性を受け入れてもらえる
	子どもにとって安心できる場所	発達に課題がある子どもへの専門的な関わり
		一人ひとりへの合理的な配慮
		穏やかな環境
		見守ってくれる
		敵ではない人とのつながり
		重層的な人との関わり
		自由意志の尊重
		楽しい場所
	子どもが変わる・子どもの成長	エネルギーの回復
		自由の保障
やりたいことができる		
やりたいと思うことを支援してくれる		
やればできるという実感を持つ		
自分で考えて行動する余白		
自分らしさの発見と発揮		
さまざまな活動		
保護者にとっての居場所の価値	安心感	保護者以外の多様な大人に育ててもらえる場所
		勉強の支援
		社会スキルの獲得/人間関係スキル
		キャリア探索機会
		楽しく生きることの大事さに気づく
		居場所ができた安心感
		アドバイスを得る
		いつでも頼れる・相談できる
		保護者の不安に対する理解
		同じ境遇の保護者と知り合える
	スタッフや他の保護者から利用者の話を聞いて安心する	
	その子のままで大丈夫という言葉	
	励ましを得る	
	不安の解消	
	自分の人生を切り開く	
一人ひとりの成長を待ってくれる		
いつでも戻れる		
安堵・喜び	子どもと距離が取れる	
	休息がとれる	
	子どもがイキイキしている	
	子どもが成功体験から自己肯定感を高める	
学び・価値観の変容	保護者も子どもも前に進める	
	子供との関わり方を教えてくれる	
	進路情報の提供	
	信頼して見守れるようになった	
	学校システムへの過剰な適応を強制しない	
	学びの定義の転換	
自分が変わる		
保護者が自分を振り返られる場所		

### 3. 保護者からみた「保護者や不登校に関わる課題・行政への要望」

保護者や不登校に関わる課題/行政への要望	
保護者にとっての課題や負担	情報不足
	個々にあった支援を受ける難しさ
	利用年齢
	勉強を教える負担
	保護者の孤独
不登校に関わる課題	居場所の認知度の向上
	フリースクールやフリースペースの学校教育への位置付け
	不登校に関する文科省と学校現場の認識のずれ
	学校の発達障害に関する理解不足
行政への要望	学校システムが一人ひとりに合わせた指導をすることへの限界
	給食のテイクアウト

## スタッフへのインタビュー

調査対象の居場所（4ヶ所）に勤務するスタッフ5名に対して、居場所の活動内容、提供サービス、どのような経験を経てスタッフとして仕事をするようになったか、スタッフとしての仕事内容などについて半構造化インタビューを行った。

インタビューデータから、1.居場所スタッフの関わり、2.居場所の抱える課題、3.居場所と学校の連携における課題と成果を整理した。1.居場所スタッフの関わりについては、利用者の価値実感のフェーズに対応させる形で整理した。しかし、スタッフの関わりは居場所の価値実感のフェーズに限定されるものではなく、スタッフは利用者一人ひとりの成長に合わせて必要な関わりをしており、フェーズにおける必須事項のようなチェックリストではないことを留意いただきたい。

#### 4. 利用者の居場所の価値実感に対応する「居場所スタッフの関わり」

利用者の価値実感のフェーズ	居場所スタッフの関わり
居場所適応期	どういう自分でありたいかを尊重
	ありのままを尊重
	存在を排除しない
	人の存在を大事にする
	存在を祝福する/できないに焦点化しない
	つながりの醸成
	一人ひとりの違いを認めた支援
	一人ひとりに寄り添った関わり方
	こうあるべきという価値観を押し付けない
	人の成長を長い時間軸で捉える
	自分のペース/自由に過ごせる場所の提供
	対等に関わる
	子どもを信じて関わる
	安心できる場をつくる
	強制をせず声をかける
	興味・関心を広げる機会の提供
	人との関わりを後押し
	本音を言い合える関係をつくる
	不登校への十分な理解
	不登校の子もたちとの経験値からくる関わり方の幅
	その場から生まれるものを大事にした関わり（自由さ、強制や決めつけがない）
親と子の境界線を区別して関わる	
特性のある子どもへの専門的な支援	
自己の回復と創造期	楽しいと感じる機会の提供
	非日常の環境を与える
	自然体験を含めた多様な体験
	体験の共有
	多様な人との出会い
	多様な人と一緒に創る活動
	保護者・OBOGと連携した授業づくり
	やりたいことを応援する
	学びの仕掛けを埋め込む
	小さな失敗を見守る
	他人とかかわるめんどくさを超えた先にある楽しさを実感してもらう
	葛藤する機会を作る
	自分の役割を見つけってもらう
	自分を客観視する経験
	大丈夫だと思える感覚を育む
	お互い様の経験を繰り返す
	機会の選択
	自由の相互承認
	子ども主体の場を共に創る
	自己決定を支える
自主性の発揮/尊重	
学習支援	
体験の言語化	
ロールモデルとの出会いを作る	
自己成長期	かっこよさ（ロールモデル）を体現する
	自分を表現する機会の提供
	自己表現を通じて互いの存在を承認する
	体験から学ぶ支援
	成功体験の機会提供
自己発展期	自己肯定感を養う
	キャリア探索の機会提供
フェーズに関わらない居場所の関わり	次のステップを決めるサポート
	学校との連携（教師と子どもの橋渡し） 親の会

## 5. 居場所の抱える課題

居場所の抱える課題	財政サポート（人材確保・施設設備）
	スタッフの労働条件
	多様化するニーズへの対応
	利用者への財政支援
	スタッフの高齢化
	すべての不登校の子どもたちに適応しない（自由な環境が苦手な退会する利用者の存在）
	不登校に対する教育行政との相互理解
	不登校に対する社会全体の理解
	社会や教育行政の特性への理解と対応

## 6. 居場所と学校の連携における課題と成果

課題	形式や書面のやり取りのみ
	学校の考え方や関わりを変化させるまでには至らない
成果	学校の関わり方の変化（校長や支援級の教員の参観）
	フリースクールに対する認識の変化（敵からパートナーへ）
	子どもの意思を尊重した学校との関わり（支援会議的なコミュニケーション）
	困っている教員へのサポート（教員との信頼関係）
	フリースペースのスタッフから子どもたちとの関わり方を学ぶ
	学校を変える取り組み（学校にいられるようになる工夫、子どもがやりたいことに学校のカリキュラムを合わせる）

発行元：NPO 法人多様な学びプロジェクト  
 調査委託先：吉村春美（東京大学 大学院教育学研究科 教育学研究員）